Architect at Home

神家昭雄 岡山の家

2003年

中村好文 =文・イラスト
YOSHIFUMI NAKAMURA

居間から水田方向を見る（早苗時）

中村氏（左）と神家氏

私は地方の講演会をわりあい気軽に引き受けてしまうタチです。

旅好きということもありますが、その土地の味覚とお酒を味わいつつ、地元の人たちの話に耳を傾けたり、他愛のないお喋りに興じることを無上の愉しみにしているからです。

岡山の建築士会と建築家協会（JIA）から声をかけてもらって講演に出掛けたのは昨年（2005年）の2月でした。講演後、岡山の建築家たちと予想通りの愉快な懇親会＝飲み会があり、そのまま二次会になだれ込みました。さらに、翌日は、朝早くから岡山の建築家の手がけた建物を巡る建築見学会まで用意されていました。まったく、下へも置かぬ歓迎ぶりです。そして、この見学会で見た建物は、数こそ限られていましたが、どれも印象に残るものばかりでした。

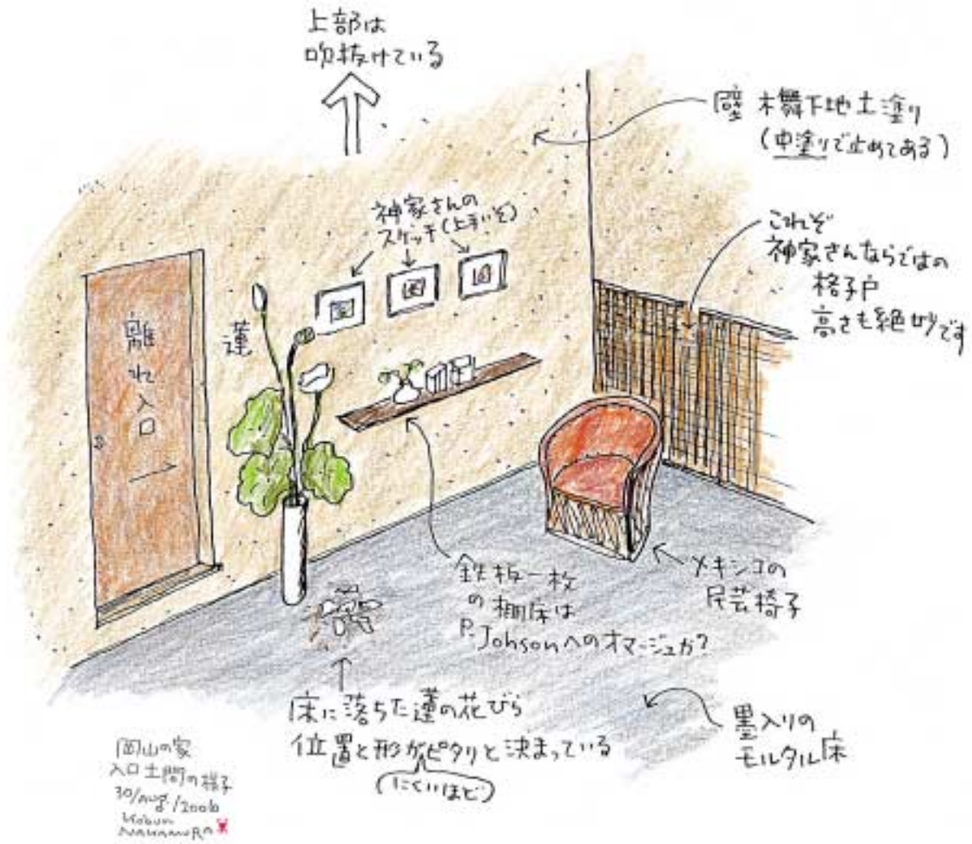
中でも、神家昭雄さんが民家の古い納屋をデザイン事務所に改修した「MTT」という作品は、なかなか見応えがありました。そして、この建物を眺めているうちに、私は神家さんからちょっとした課題を出されたような気分になっていました。もう少し分かりやすく言えば、サラリと見て「良かった、良かった」では済まされない気持ちになっていたのです。同じ気持ちは直後に見学させてもらった神家さんの自宅「岡山の家」でも感じました。

神家さんは、木訥な印象の中に誠実で温かい人柄を感じさせる人物です。そして、ちょっと話をしただけで、建築に対する並々ならない情熱の持ち主であることが分かりました。建築視察のために外国にもよく出掛けているようですし、旅先では街並みや建築をたくさんスケッチしています。また、よく本を読んでおり、展覧会や映画にも足繁く通う人です。知識と経験が豊富ですから、当然、話題は尽きない感じになります。訥弁タイプの神家さんと、チャラチャラお喋りするタイプの私とは、不思議とウマが合って、出会ったとたんに年来の友人に再会したように話に熱中しました（…といっても、これは私の一方的な思いこみで、神家さんがどう思ったかは知りません）。

そんな調子で、神家さんの自宅の居間で高さを抑えた開口部から外を眺めながらあれこれ話し込んでいた時、一瞬の沈黙を

早苗時の水田越しに東面外観を見る

居間から台所方向を見る



挟んで神家さんがこう言いました。「この家は、こちら側が田圃に面しているでしょう。ここはね、田植えが終わって一週間ほど経った早苗の頃が素晴らしくいいんですよ。苗の間から水面が水鏡のようにのぞいてね、それはそれは、綺麗です。ぜひその頃、泊まりに来ませんか？歓迎しますよ」

そばにいた奥さんの祝代さんも、ぜひ、ぜひ、という感じで満面の笑顔で頷いてくれます。もちろん、私が断るはずはありません。「来ます、来ます！今年の早苗の頃、来ます」と、勢い込んで応えました。そこまでは良かったのですが、早苗の期間はあんがい短く、私は、昨年のその時期にチャールズ・ムーアの「シーランチ」に泊まりに出掛けていて、機会を逃してしまいました。しかし、今年はこの連載も始まったことだし、早苗見物と取材のタイミングをうまく引っかけようと目論んでいました。ところが、今年も、その早苗の時期にイタリアに行くことになり、残念無念、またしても機会を逸してしまいました。

ようやく念願が叶ったのは、早苗ではなく、稲穂も色づきはじめた8月の終わりでした。

1年半ぶりに「岡山の家」を訪れると、神家さん夫妻とお嬢

居間吹抜け部分

さんをはじめ、年若い所員の面々と、講演会の折に世話役をしてくれた女性建築家たちが賑やかに集って歓迎してくれました。神家さんの事務所が、普段、どんな様子なのか分かりませんが、所長の自宅に集まってきた所員たちは家族のようにリラックスして見えました。感心したのは、彼らがただリラックスしているだけでなく、よく気がついて、実にマメに働くことです。ひとことで言えば“気働き”がいいということになるのですが、台所で奮闘する奥さんをテキパキと手伝う様子が、見ていて本当に気持ちがいいのです。一方の神家さんは、里帰りした親孝行な息子と娘にかしずかれる家長という風情で、満足げな微笑を浮かべつつ、ちびりちびりと杯を傾けていました。

この住宅は民家に範をとった間取りや、工法や、素材の扱いが見どころですが、こうした家の造りは、大家族的な人間関係やその気配を醸し出しやすいのかも知れません。床、壁、天井、そして建具などから滲み出す“懐かしい気配”には、人と人を親密に結びつける作用がある、と言い替えても良いでしょうか。

夜が更け、宴が果てて私が泊めてもらったのは、「離れ」と呼ばれる6畳の部屋です。「離れ」といっても玄関の広い土間を介した向こう側にある部屋ですから、正確に言えば、家の中の「離れ」です。玄関ホールからいったん土間に降り、サンダルを履いて行くことになるので「離れ」の感じがよく出ていて、この家の平面計画で私がもっとも心惹かれるところです。かつて、フィリップ・ジョンソンがロックフェラー夫人のために設計した「タウンハウス」を訪れたことがありますが、そこには、寝室に行くのに、中庭にしつらえた池の飛び石を渡って行くという心憎い演出がしてありました。この土間にはちょっとそれに似た趣も感じられます。そういえば、この土間には鉄板一枚を壁に水平に切り込むように差し込んだシャープな「棚床」がありますが、同じようなアイデアが「タウンハウス」にもあるので、このあたりは、神家さんから、フィリップ・ジョンソンの「タウンハウス」への、時空を超えたオマージュなのかもしれません。

離れ

部屋の入り口脇には、所員の中では先輩格に見受けられる女性が生けてくれた背丈ほどもある見事な蓮が、宿泊客である私を一晩中、衛兵のように守ってくれていました。

このへんで、最初に書いた神家さんからの「課題」にも触れておかなければなりません。課題をひとことで言えば「現代建築における民家的なヴォキャブラリーをどう評価するか？」ということになると思います。

神家さんの作品を見る人は、彼が「達者な建築家」、「デキル建築家」だということがたちどころにわかるはずです。塗り壁や無垢の木材など伝統的な素材を熟知しており、それを自在に使いこなす技量の持ち主ですし、建具を含めた開口部の扱いも、それは見事です。プランと空間の構成は、時にはダイナミック、時には繊細という具合に、ほどよくメリハリが利いています。その上、居心地は良く、使い勝手も申し分なさそうな住まいです。しかし、「そうした全ての美点が集合したときに、いっそうの魅力が生まれているか？」と問われると、私は、ふと立ち止まらざるを得ません。

この家では“民家風”という目に見えない怪物が、私の前に諸手を広げて立ちふさがるような気がするからです。

逆説的な言い方になりますが、民家から多くのことを学んだ神家さんの建築は、民家風を感じさせない方が、その本来の良さが際立つのではないだろうかと、不遜にも私は考えていました。

こんな印象を持ったのは、神家さん夫妻の寝室の畳に正座して、絶妙な幅と高さの窓から、初秋を感じさせる空を眺めていたときです。この寝室の壁は、ただプラスターボードを張りっぱなしの仕上もないままですが、木舞下地の上に土塗りする本格的な壁でないことで、実にあっさり、軽やかに、そしてなによりもモダンに感じられたのです。

この印象を、私はその場にいた神家さんには伝えませんでした。

こうした話は、たぶん、早苗に覆われた水田をしみじみ眺めながら、ポツリ、ポツリとするのが良さそうだと思ったからでした。❋

なかむら・よしふみ――建築家／1948年生まれ。武蔵野美術大学建築学科卒業。1972〜74年、宍道設計事務所。1975年、都立品川職業訓練校木工科にて家具職人の訓練を受ける。1976〜80年、吉村順三設計事務所。1981年、レミングハウス設立。
三谷さんの家（1986）、REI HUT（2001）などの住宅作品の他に、『住宅巡礼』（新潮社　2000）、『意中の建築 上・下』（新潮社　2005）などの著作がある。